仏蘭西文学と僕

芥川龍之介

青空文庫

僕は中学五年生の時に、ドオデエの「サッフォ」という小説の英訳を読んだ。もちろんどんな読み方をしたか、当てになったものではない。まあいいかげんに辞書を引いては、頁をはぐっていっただけであるが、ともかくそれが僕にとっては、最初に親しんだ仏蘭西小説だった。「サッフォ」には感心したかどうか、確かなことは覚えていない。ただあの舞踏会から帰るところに、明け方のパリの光景を描いた、たった五、六行の文章がある。それがうれしかったことだけは覚えている。

それからアナトオル・フランスの「タイス」という小説を読んだ。なんでもそのころ早稲田文学の新年号に、安成貞雄君が書いた紹介があったものだから、それを読むとすぐに丸善へ行って買って来たという記憶がある。この本は大いに感服した。（今でもフランスの著作中、いちばんおもしろいのは何かと問われれば、すぐに僕は「タイス」と答える。その次に「女王ペドオク」をあげる。名高い「赤百合」なぞという小説は、さらにうまいと思われない）もっとも議論のおもしろさなぞは、所々しか通じなかったらしい。しかし僕は「タイス」の行の下へ、むやみに色鉛筆の筋を引いた。その本は今でも持っているが、当時筋を引いたところは、ニシアスの言葉がいちばん多い。ニシアスというのは警句ばかり吐いているアレクサンドリアの高等遊民である。――これも僕が中学の五年生の時分だった。

高等学校へはいったのちは、語学も少し眼鼻がついたから、時々仏蘭西の小説も読んでみた。

ただしその道の人が読むように、系統的に読んだのでもなんでもない。手当たりしだいどれでもござれに、ざっと眼を通したのである。その中でも覚えているのは、フロオベルに「聖アントワンの誘惑」という小説がある。あの本が何度とりかかっても、とうとうしまいまで読めなかった。もっともロオタス・ライブラリイという紫色の英訳本で見ると、むちゃくちゃに省略してあるから、ぞうさなくしまいまで読んでしまう。当時の僕は「聖アントワンの誘惑」も、ちゃんと心得ているような顔をしていたが、実はあの紫色の本のごやっかいになっていたのである。近ごろケエベル先生の小品集を読んでみたら、先生もあれと「サランボオ」とは退屈な本だと言っている。僕は大いにうれしかった。しかしあれに比べると、まだ「サランボオ」なぞのほうが、どのくらい僕にはおもしろいか知れない。それからド・モオパスサンは、敬服してもきらいだった。（今でも二、三の作品は、やはり読むと不快な気がする）それからどういう因縁か、ゾラは大学へはいるまでに、一冊も長篇を読まずにしまった。それからドオデエはその時代から、妙に久米正雄と似ている気がした。もっともその時分の久米正雄は、やっと一高の校友会雑誌に詩を出すくらいなことだったから、よほどドオデエのほうが偉く見えた。それからゴオティエはおもしろがって読んだ。なにしろ絢爛無双だから、長篇でも短篇でも愉快だった。しかし評判の「マドモアゼル・モオパン」も西洋人のいうほどありがたくはなかった。「アヴァタアル」とか「クレオパトラの一夜」とかいう短篇も、ジョオジ・ムウアなぞがかたじけながるように、渾然玉のごとしとは思われなかった。同じカンダウレス王の伝説から

も、ヘッベルはあの恐るべき「ギイゲスの指輪」を造り出している。が、翻ってゴオティエの短篇を見ると、主人公の王様でもなんでも、いっこう溌溂たる趣がない。ただしこれはずっとのちに、ヘッベルの芝居を読んでいた時、その編輯者の序文の中に、ことによるとゴオティエの短篇が、ヘッベルにヒントを与えたのかも知れないという、もっともらしい説をあげていたから、またゴオティエを引っぱり出してみて、その感を深くしたような次第である。それから、——もうめんどうくさくなった。

いったい僕が高等学校時代に、どれこれの本を読みましたと言ったところが、おもしろいことも何もあるはずはない。せいぜい人を煙に捲くくらいが落ちである。ただせっかくしゃべったものだから、これだけのことはつけ加えておきたい。というのは当時あるいは当時以後五、六年の間に、僕が読んだ仏蘭西の小説は、たいてい現代に遠くない。あるいは現代の作家が書いたものである。ざっとさかのぼってみたところが、シャトオブリアンとか、——ぎりぎり決着のところと言っても、ルッソオとかヴォルテエルとか、より古いところへは行っていない。（モリエエルは例外である）もちろん文壇に篤学の士が多いから、中には Cent nouvelles Nouvelles du roi Louis XI までも読んでいるという大家があるかもしれない。しかしそういう例外を除くと、まず僕の読んだような小説が、文壇一般にも読まれている仏蘭西文学だと言ってもよい訳である。すると僕の読んだ小説のことを話すのは、広い文壇にも大いに関係があるのだから、ばかにして聞いたり何かしてはいけない。——これでもまだもったいがつかなければ、僕

がそんな本しか読んでいないということは、文壇に影響を与えた仏蘭西文学は、だいたいそんな本のほかに出ないということになりはしないか。文壇はラブレエの影響も、ラシイヌやコルネイユの影響も受けていない。ただおもに十九世紀以後の作家たちの影響を受けている。その証拠には仏蘭西文学に最も私淑している諸先輩の小説にも、いわゆるレスプリ・ゴオロアの磅※（ほく）しているような作品は見えない。たとい十九世紀以後の作家たちの中に、ゴオル精神からほとばしった笑い声が時々響くことがあっても、文壇はそれに唖（おし）の耳を借すよりほかはなかったのである。この点でも日本のパルナスは、鴎外（おうがい）先生の小説通り、永久にまじめな葬列だった。

——こんな理窟（りくつ）も言えるかもしれない。だからこの僕の話も、いよいよばかにして聞いてはいけない。

（大正十年二月）

青空文庫情報

底本：「藪の中・将軍」角川文庫、角川書店
1969（昭和44）年5月30日改版初版発行
2009（平成21）年2月25日改版38版発行
※底本巻末の編者による語注は省略しました。
入力：岡山勝美
校正：坂本真一
2017年1月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

仏蘭西文学と僕

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/